江國香織と文体について（エッセイ）

蜜江田初郎

■はじめに

「好きな作家は誰？」と聞かれたら、江國香織と村上春樹と吉本ばななと、必ずこの三者を答えるようにしている。それは習慣でもある。でも例えば今は「川上未映子」を付け足したい欲だってある。けど習慣はそれを超える。おそらく「好きな～は何？」という質問は、「好きを続けられる～は何？」という事を意味しているし、さらには移ろいやすい性格の人に対しても「そこまで続けられるのは何故？」という問いに差し変わっていくだろう。

では僕にとって江國香織と村上春樹と吉本ばななを同一の地平に置くことは何を意味するのか？　それを考えても一向によくわからない。今のところ三者に大きな共通性があるとも思えない。とりあえず江國香織、村上春樹、吉本ばななと馬鹿正直に順番にでも並べてそれぞれの作家について小さな考えを積み重ねていくことによってしかその解答は得られそうもない。

（本稿では、江國香織の全体像を俯瞰するだけで枚数もいっぱいになってしまった。当初では、村上春樹氏については最新作『多崎つくると、彼の巡礼の年』の簡単な読解を、それから吉本ばなな氏については彼女が提示する都市と自然の問題を論じた小論考を展開するつもりであった。これらについては、また機会のあるときに取り組みたい。）

■江國香織と感性

江國香織は何と言っても文体の（を見るべき）作家であると思う。僕は彼女の文章に魅せられて、もしも小説の文章構成をざっくりと、A．文章の形式（文体）とB．内容（言葉たちが指し示すもの）とに分けることができるのなら、Aのみで自律した、充実した文学（それはある意味において逆説的にも一つの内容を形成している、と言えるだろう）というものが存在するのではないか、と考えるきっかけを与えられた。文章の構成自身があまりに甘美すぎるためそれ自身が指し示す内容をいわば超え出てしまっている、という感じだ。

今、手元にある彼女の代表作から適当にいくつか引いてみる。

> エスコバル、という名の小さな町の日本人居留区で、佐和子は生まれ育った。あの町の空の青さと、はためくシーツのひんやりした匂い――妹と二人で、よく顔をくっつけたものだ。濡れた、大きな、つめたい布に――を、佐和子は懐かしく思い出す。月曜日には、だからよく遅刻をした。（『金平糖の降るところ』（単行本）、三ページ。）

一体どうして、倉敷の玉子はこんなに美味しいのだろう。皿に残った黄色い液体―やわらかなスクランブルエッグを食べ終わったあとの、バターの香りの強い玉子液―をパンの切れ端ですくいとり、静枝はガラス越しの日ざしに目を細めた。目の前の何もかもが心愉しい。うすピンク色のテーブルクロスも、各テーブルに一輪ずつのカーネーションも、銀色の砂糖壺におしこまれた合成甘味料の小袋さえも、運命的必然によってここにあるのだという気がした。(『ホリー・ガーデン』文庫版、九十ページ。)

ママはシシリアンキスというカクテルを飲んでいた。カクテルをつくるのはパパの役目で、パパのつくるシシリアンキスは「倒れそうに甘くて病みつきになる味」だったそうだ。グラスの液体はとろりとした琥珀色で、「午後の戸外の飲み物として、あんなに幸福なものはない」らしい。氷が日差しをうけてみずみずときらめくのだそうだ。(『神様のボート』文庫版、九ページ。)

江國は感覚に訴える形容をよく使う。ばかばかしいほど、ひんやりした、きらきらする……。

あまりに甘美ですらある言葉たち。江國の記述するその形容はしかし、とてもなじみやすい言葉でもあり、私たち一般の読者にも十分に開かれている。彼女は以前どこかで「よく感じて生きること」の大切さを語っていた。感性の――こういってよければ――積極的な使用は、彼女の小説において多々、生の深みへとつながる。

もう少し簡単な語り口から見ていこう。彼女が抱える豊富な言葉たちの中から、みずみずしい(きらきら光る)感性で選ばれた言葉は、文章の中でかたちを作り、指示された事物の世界を作り出す。それはまさに、<今>、<ここの>、世界である。『神様のボート』の主人公の娘である草子を生んだ二人が愛するカクテル――「倒れそうに甘くて病みつきになる味」「午後の戸外の飲み物として、あんなに幸福なものはない」――のきらめきは、私たちの内奥の世界にまっすぐ飛び込んでくる。しかしそれでいてなお、そういう〈今〉〈ここの〉十分に豊富で根を張った世界に在りながら、もう一方の側面で江國の軽やかな文体は、大地をはるかに越えて私たちが決して到達し得ないような地点での味わいといったものを提供してくれる。このとき確かに文章は二重化している。一つは、江國と私たち読者とのあいだにひらかれる間主観的な地平で共通了解されるところの、こういってよければ指定された“充実”世界。そうしてもう一つは、そうした充実世界をはるかに超える、内容を持たないがゆえに、一層美しさの際立つ浮遊する世界。そうして、文章＝生(文章という生、文章にとって展開される生)の二重化は、感性の深き行使によって可能となるのである。

■リアルなものの描写

話をもう一つ展開させる。それは江國のリアルなもの（現実）についての描写である。先ほどの文章＝生の二重化の議論は、ともすればプラトン的な昏き洞窟の世界と、理想的なイデア界との対比を想起させる。形式美としてのきらびやかな世界は、そうしたプラトン的な理想郷として捉えられるべきなのだろうか？

むろん、答えは否である。話はもう少し複雑であるからだ。何故なら江國は、一見平穏と見える光景の中にも、実に巧みに残酷なまでの冷たさとおぞましさを回帰させるからだ。そして、それらとどう付き合っていくのかというのも、江國作品を見るときの重要な視点である。

以下では、『ホリー・ガーデン』という初期の作品を題材にして、江國の文章＝生とリアルなものとの関係を探っていこう。

『ホリー・ガーデン』の主人公の一人である果歩は、ごく一見普通のＯＬだが、恋愛生活において人とはちょっと違った奔放さを放っている。果歩は元彼であった津久井という過去の恋愛を重く引きずったまま、例えば仕事先の眼科医の柴原や、店の顧客である大学生のこうくんと性的な関係を何回か持ったりする。そのなかで、同じ仕事先に勤めている中野という人物は、果歩と性的関係に陥らず、また果歩が他の複数の男と寝たりしているのを知っているにもかかわらず、彼独特の愛情を見せる。果歩もそんな中野に対して優しい愛情を抱いている。

重要なのは、果歩の性的に自由な側面が、必ずしも光に満ちた、望ましいものとしてばかり描かれていないことである。たとえば次の一節は、性的自由に明け暮れる自分の逸脱さ・暗さによりかかっていることを示している。

> ホームに続く階段をおりると、そういえば今朝ここでこうくんと別れたのだと思いだし、それは果歩を愕然とさせた。今朝この同じホームに立ってあの男の子を見送ったことを、こんなにもきれいさっぱり忘れていたなんて―。私には何か決定的に欠落しているのだ、と思った。まるで百年前の記憶のようではないか。（『ホリー・ガーデン』単行本、百二十二ページ。）

そんなちっぽけな躁と欝を繰り返す日々の中で、果歩と中野の関係はしだいに微妙なものとなっていく。主人公のもうひとりである果歩の親友である静江が的確に診断するように、中野は「果歩にとっての精神安定剤のようなもの」、「都合のいいもの」でもあったのだ。

しかし、そんな中野を失うこともまた一つの残酷なリアルである。なぜなら中野がこれまで果歩にしてきたこと、果歩が中野に愛着を感じていたこともまた、一つの厳然たる事実だからだ。

物語の終盤、二人は仕事帰りにお互い話すことがあるといって帰路を一緒にする。物語全体のクライマックス―江國作品に特有の、ほんのちょっとした起伏あるシーン――であ

る。

果歩は前を向いたまま中野に呼びかけた。

「ね、ビデオ借りて帰らない？」

中野は苦笑する。

「だめだよ、果歩さんかんべんしてよ」

じゃあいい、と、果歩はあっさりこたえたが、足どりが重たいのは疲れたせいではないのがわかっていた。もうすぐマンションについてしまう、と思うと気が急いた。果歩はとりあえず立ち止まってみる。中野は二、三歩歩きかけてふり返り、どうしたのと訊く。果歩は中野の目をじっと見て、あきらかに訴えかける表情で、どうしようもないとこたえた。中野は再び坂をのぼってしまう。

果歩はもう一度立ち止まる。ほとんど泣き出したい気持ちになっていた。中野はまたふりかえったが、今度は何もたずねなかった。

「わかってるんでしょう？」

かわりに果歩が質問をする。

「私がいま中野くんにどうしてほしいか、ほんとはちゃんとわかってるんでしょう？」（文庫版、三百六ページ。）

このシーンで、果歩は必死に戦っている。果歩なりのやり方で、中野を失うという一番怖しいリアルを避けるために、中野ときっちり向き合うことを選ぶ。その答えはとてもシンプルなものである。

「わからないよ」

と中野はいった。

「ちゃんと言ってくれなくちゃわからない」

さらに一分近くにらみあってから、ばかばかしいほど小さい声―蚊どころかノミの鳴くような声、とのちに中野が回想することになる声―で、きょうは帰らないで、と、果歩は言った。

「きょうは帰らないで。泊まっていって」（文庫版、三百七ページ。）

■まとめ

江國の文体は、一方で根のはった世界を形づくりながら、もう一方で美しさに満ちた世界をも参照＝参入する。しかし彼女の文章＝生はそれだけに留まらない。彼女は現実が持つおぞましさ・いやらしさをひと時も忘れない。それらが彼女の世界にひび割って入ってくるとき、彼女の繊細で優しい筆はポジティヴな力 puissance へと生成し、昏き現実をも打ちくだく、ポップで笑いのある日常を作り出すのだ。（了）